

空手・古武道の歴史

相手を倒すことが目的ではなく、身を守り、精神を鍛えるための沖縄の武術。その受継がれてきた技の歴史を訪ねます。

壺

空手の歴史

沖縄には、「手（ティー）」と呼ばれる古来の武術がありました。中国との交易が開始されて以降（一三二二年）中国武術が導入され、沖縄の風土に合うように形成され、発展してきたのが唐手（空手）と言われています。

門外不出の武術として、口伝で受継がれていた唐手（空手）が大きく発展するきっかけとなったのは、尚真王（一四七七年～一五二六年）の時代と、一六〇九年の薩摩による琉球侵攻後と伝えられています。武士階級においても武器の携帯が禁じられたこともあり、素手で身を守る武術が発展することとなります。

王国時代には、首里を中心に発達し、柔軟性を重視した型が特徴の首里手をはじめ、商業都市那覇で栄えた筋骨重視の型が特徴の那覇手、両者の中間にあった泊村一帯では首里手に近い



首里市第一小生による集団演武（仲宗根源和著『空手道大観』より）

型を持つ泊手が発達し、それぞれの地域で著名な武人を数多く輩出してきま

した。

明治後期になると、首里手系の大家・糸洲安恒（一八三一年～一九一五年）によって「唐手十か条」がまとめられ、厳しい鍛錬によって身体と心を鍛え上げる空手は、学校教育の現場にも取入れられるようになります。「一子相伝の秘密主義」から社会性をもつようになり、呼称も「唐手」から「空手」へ変わり、一九二〇年代以降からは現在の流派の形が体系化されていきました。

現在では、世界大会も頻繁に開催されるようになり、沖縄の伝統文化を継承する多くの若者が世界各国で育っています。

弐

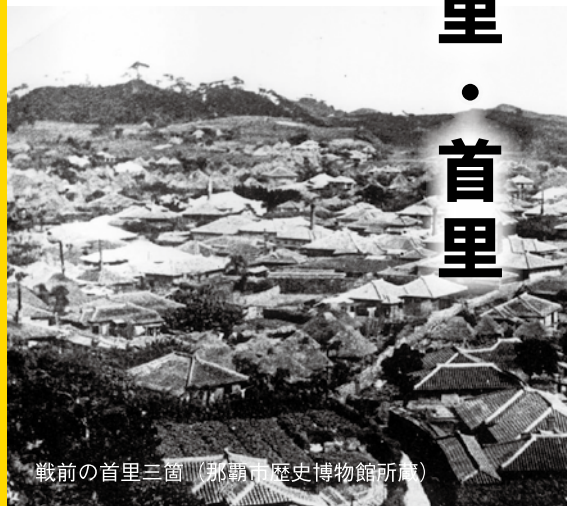
古武道の歴史

古武道とは、棒、釵、ヌンチャクやトンファーなどを使った沖縄古来の武

空手古武道の里・首里

泡盛酒造所のある首里三箇村は、麴の香り漂う静かな町。その昔、多くの武人たちがここに集い、後世に名を残した空手家も生まれました。

文：文武館／仲本政博氏



戦前の首里三箇（那覇市歴史博物館所蔵）

首里三箇村に集まった武人たち

鳥堀、赤田、崎山は、古くから首里三箇村と呼ばれ親しまれてきた地域です。台地にもかかわらず、緑の山々に豊富な水脈が通っており、昔から泡盛酒造業の盛んな所としても広く知られています。

王国時代の泡盛は、主に薩摩に上納するための酒として醸造されていました。上納で余った酒は自由に使うことができたため、その酒を売りさばき莫大な富を得ていた者も多く、強盗などの用心のため、泡盛工場はこぞって優秀な武人を用意棒として求めていました。首里三箇村には、高給を求めて沖縄全土から大勢の武人が集まり、腕を競いお互いの実戦武術向上をはかると云われています。

唐手佐久川の里・鳥小堀

首里三箇村は、沖縄空手古武道の創始者と崇められている唐手佐久川（九世佐久川寛賀）の里としても知られています。寛賀は、中国留学の経験を持ち、八重山在藩筆者を経て、後に琉球国学の教師となった人で、中城間切佐久川の名島（姓）を賜り、照屋から佐久川を称するようになりました。「沖縄一千年史」（真境名安興）には、沖縄の武技という題名で次の様な一文があります。

「沖縄固有の武芸、田舎の舞方なるものは、唐手発祥前に在りて著名の武術家を出したれども唐手の名の判然世の中に知れ互りたるは、赤田の唐手佐久川にして近代に属す。とあれば尚穆王時代迄は唐手の名なく、新奇の組合

術です。沖縄で古武道が登場するようになったのは、十一世紀～十二世紀頃の「南山」「中山」「北山」の三山分立時代からとされています。その後、中国との進貢貿易の中で、様々な武器や武術が沖縄にもたらされ、首里の武士階級を中心に発達し地方にも広まっ

ていきました。

空手と同時期に転機を迎えた古武道は、必然的に生活用具、農機具、漁具を武器として使う研究がなされると、沖縄の隠れた武術として独自の発展を遂げることとなります。

古武道の型の名称には、型を生み出した武人やその地域の名前が冠され、棍と呼ばれる棒を使った棒術では「添石の棍」や「佐久川の棍」、釵術では「津堅志多伯の釵」や「湖城の釵」などが今も受継がれています。

空手同様、その継承についても秘密性が保たれていましたが、二〇世紀に入ると、屋比久孟伝（一八七八年～一九四一年）、又吉眞光（一八八八年～一九四七年）、平信賢（一八九七年～一九七〇年）等によって古武道の体系化が進み、流派の組織的な結成が活発になり、社会的に開かれていくこととなります。

長年にわたる厳しい鍛錬によって身体と心を鍛え上げる沖縄古武道も、世界の国々に広く普及し、発展を遂げています。

術として広く世に行われざりしなるべし」

寛賀については、戦前の最強空手家として勇名をとどろかせた本部サール（本部朝基）もその力量を讃えており、寛賀の編み出した勇猛果敢な気風が漂う棒術は、「佐久川の棍」として現在も伝承されています。

寛賀が住んでいた場所は、現在の鳥堀町公民館近くにあり、その子孫は、大正時代以降、大角座近くに移り住みました。赤田村と鳥堀村の境界地となるこの場所からは、沖縄の空手古武道の達人が多く生まれ育ち、現在もその子孫がその武術と魂を継承しています。



空手古武道道場「文武館」（鳥堀町）

国王頌徳碑（こくおうしょうとくひ）

「国王頌徳碑」は、琉球王国時代の一五四三年に建立された石碑。碑文の内容は首里城から、弁ヶ嶽への参道を整備した国王尚清の徳を讃えています。また「上の毛」の東端部を「かたのはな」といい、この地先に建立されたため別名「かたのはなの碑」ともいいます。

鳥小堀瓦屋（トゥンジミイガラヤ）跡

弁ヶ嶽参詣道を上りつめた右側の土手一帯に「トゥンジミイガラヤ」と呼ばれる瓦を焼いた窯跡がありました。十七世紀、尚貞王代に首里城の屋根を瓦葺きにした時の窯跡といわれ、ここから黒瓦や赤瓦が大量に出土します。現在は住宅地になっています。



国王頌徳碑（かたのはなの碑文）



参

古武道の武具

棒（ぼう）

万能武器と言われる棒。中国の棒は細くしなるのに対し、沖縄の棒は固く太いのが特徴。長さは六尺。

釵（サイ）

王国時代には、大筑（ウフチク）と呼ばれた警官が携帯し、階級を表すと同時に護身等にも利用されていた。

ヌンチャク

攻撃的に使用せず、相手の攻撃を弱め、沈静化するのが目的とされていた。

櫂（ウェーク）

漁師が使っていた小舟を漕ぐ櫂をそのまま利用した道具のひとつ。相手に砂を掛けて目潰しなどの攻撃に使用。

トゥンファー

短い棒に取っ手がつき、カタカナの「ト」の形をした武器。多彩な動きで攻撃と防御のバリエーションが豊富。